

## H・ジェイムズ『鳩の翼』II

——ケイト・クロイをめぐる——

堤 千佳子

### I

「1902年に出版された『鳩の翼』は、非常に古い—非常に若いと言った方が適切かも知れない—着想に基づく作品である。」<sup>1)</sup>ジェイムズがその序文で述べているように、この作品は若くして亡くなった彼の従妹、ミニー・テンプルを連想させるミニー・シールを主人公とするもので、この小説の依存する状況が心に映っていなかった時を思い出すことができないほど彼の中で大きな重みをもつ作品である。

The idea, reduced to its essence, is that of a young person conscious of a great capacity for life, but early stricken and doomed, condemned to die under short respite, while also enamoured of the world; aware moreover of the condemnation and passionately desiring to “put in” before extinction as many of the finer vibrations as possible, and so achieve, however briefly and brokenly, the sense of having lived.<sup>2)</sup>

この主題を扱うにあたって、ジェイムズは「作品の中心人物として病身の若い女性を設定し、その衰弱の全過程とその意識の試練全体」<sup>3)</sup>を描き出すことに重点をおいている。しかし、ジェイムズが書こうとしたのは彼女の挫折だけの記録ではない。「あらゆる抵抗にもかかわらず、決定的に訪れる破局の物語」<sup>4)</sup>ではあっても、彼女が望むものは生の充実なのである。

「残り少ない時間からできるだけ人生の果実をもぎ取ろうとする彼女の衝動が、そのような渴望が、他の人々の助力があって初めて満たされるとするならば、彼らの参加もまた彼らのドラマを一彼ら自身の動機や、観点に基づく理由や、利害や、利益のために、彼女自身の幻想を助長するドラマを形成するのである。」<sup>9)</sup>こういった点から、主人公を十分に描くためには、彼女自身の状態だけではなく、それに相関する面として彼女に影響された他の人々の状態を描くことが肝心だと考えている。

ジェイムズは、彼女の存在は「彼女の周囲に、巨大な船が沈んだ時か、あるいは大事業が倒産した時に生じる海水の渦巻き運動に相似た現象を引き起こすであろう。そして、我々の心に浮かぶのは、強力で狭まっていく渦であり、巨大な吸引力であり、近くのもの免れがたい何もかも巻き添えにして吸い込む力である。」<sup>10)</sup>と述べている。<sup>7)</sup>これをより効果的に書くためにも、ジェイムズは「主題の表面の背後に回って見たいという好奇心」<sup>8)</sup>を大胆に主張し、「外周から始め、包囲を狭めながら中心に近づく戦術」<sup>9)</sup>を採ったのである。従って周囲に何人かの中心的人物を設定し、その立脚点から揺るぎない構成を作り出している。また、各章によって、あるいは、状況に応じては一章のなかでも場面によって物語が語られる視点的人物を交替させ、間接的にミリーを描いている。

『鳩の翼』において、主人公ミリー・シールの他に、大変魅力的な人物として、ケイト・クロイの存在があげられる。この作品の特徴の一つとして主人公ミリー・シールの不在があるが、このケイト・クロイはその不在を補って余りある人物として作品の冒頭から登場する。この他にも重要な人物は、アメリカ側に一人、イギリス側に三人あげられるが、ケイトこそはもう一人の主人公と言って差し支えないほどの比重が置かれている。実際、主人公ミリーはこの作品が始まって第一部、第二部では姿を全く見せず、ケイトにまつわる人間関係や環境が詳しく描かれている。本稿はケイトの持つイメージの変化に応じてケイトとミリーの関係や、ここまでケイトに比重を置いたジェイムズの意図を考察することを試みるものである。

## II

第一部はケイトの家族構成や、現在の状況や抱えている問題が彼女の視点で語られている。不名誉な事をしてかした父と、不幸な未亡人になった姉が彼女のしがらみとなっている。しかも経済的に恵まれないこの二人はケイトを利用することしか眼中になく、裕福な叔母、ラウダー夫人を通じて打算的な結婚をさせ、その恩恵に預かろうとしている。しかしケイトはあまり裕福でない恋人マートン・デンチャーとの愛を貫くため、叔母の許から立ち去り、父と一緒に暮らそうと申し出ている。この時点でのケイトのデンチャーに対する愛情は純真なものであったと言える。しかし彼女が叔母の持つ贅沢な暮らしに心をひかれたことも否定のできない事実である。そしてこのことは彼女の持つ富への強い希求心を暗示している。

第一部で注意すべきこととして、ケイトが雌ライオン（ラウダー夫人）の檻に入れられた子羊のイメージで自分を見なしていることがある。ケイトは自分を犠牲者としてラウダー夫人や彼女に象徴される俗悪で打算的な社会に貪り食われるのではないかという危惧を抱いている。ラウダー夫人はケイトによって、その「強い意志力と高慢な支配力」<sup>10)</sup>や「派手な俗物根性」<sup>11)</sup>などによって「市場のブリタニア」<sup>12)</sup>と名付けられている。

第二部ではケイトとデンチャーとの関係が明らかにされる。この二人は全く異なった性格故に魅かれあったのであるが、二人の富に対する考え方の違いは最初から明示され、後の破局への伏線となっている。二人の結婚の障害が金銭問題であるということは二人ともはっきりと自覚している。ケイトにとって金銭は結婚の為の必要条件であった。

It makes me ask myself if I've any right to personal happiness, any right but to be rich and overflowing, as smart and shining, as I can be.<sup>13)</sup>

更にケイトは「私達は恐ろしく頭が良い」、そして「私は何か卑劣な事をする危険がある」<sup>14)</sup>とその後のミリーに対する策略を暗示するような言葉を述べる。しかしケイトが精神的に豊かなものを持ったデンチャーとの結婚を何とか成就させたいと望んでいることに疑う余地はない。「神を証人にして、私の血の最後の一滴まであなたに捧げます。」<sup>15)</sup>という彼女の言葉に愛情の激しさが現れている。しかし父や姉からの圧迫、叔母との関係から、何もかも捨てて彼の許に走ることも不可能なのである。ケイトが「金色の爪を持つ鷲」<sup>16)</sup>のイメージで表される叔母の支配力から逃れることは困難なのである。ここでもケイトには補食動物に囚われているもののイメージが用いられている。

第三部で初めて主人公ミリーが姿を現す。ここでミリーの経歴や財産、人柄などが彼女の付き添いであるボストン出身の作家、ストリングム夫人の視点で述べられる。ケイトとは対照的に、「失おうとしても失うことはできない」、「持ち主の人格の一部」<sup>17)</sup>である富を持つミリーは、健康に恵まれず、背後に死の影を感じさせる悲劇の王女のイメージで描かれている。しかし、ミリーの生に対する強い意志や「人間」というものに対する探求心なども述べられている。

For she (Mrs. Stringham) now saw that the great thing she had brought away was precisely a conviction that the future was n't to exist for her princess (Milly) in the form of any sharp or simple release from the human predicament. It wouldn't be for her a question of a flyig leap and thereby of a quick escape. It would be a question of taking full in the face the whole assault of life, the general muster of which indeed her face might have been directly presented as she sat there on her rock.<sup>18)</sup>

ミリーが「地上の王国を見下ろしている」<sup>19)</sup>かのようにアルプスの絶壁の上で腰を降ろしているところを見たストリングム夫人の得た確信が、ロン

---

ドン及びヴェニスでミリーを待ち受ける苦悩の未来を暗示している。そしてミリーのロンドンに向かう目的の一つにデンチャーと再会することがあることが書かれている。

第四部でミリーはストリングム夫人の昔の友人であるラウダー夫人のついででロンドンの社交界を体験する。ケイトとミリーの間に友情が芽生えるが、お互いに一線を画すようなところがあるのは否めない。ミリーはケイトに頭の良さは認めるが、何か見通すことのできないものを感じている。そしてミリーは「この新しい友人(ケイト)の微かに残酷な性格のなかに、一種の荒々しい美しさを、いやそれどころか一種の奇妙な優雅さ」<sup>20)</sup>を感じ取っている。また、デンチャーのことを知っているケイトが、ミリーにはそのことを一言も打ち明けなかったことでミリーはケイトに対して微かな疑惑を持つようになる。そして「完全には信頼できないケイトがいるという印象」<sup>21)</sup>が強まるばかりになる。一方ケイトはミリーに対してその富への賛美の念を持つが、そのことで友情にひびが入るとは思っていない。しかし同時に自分とミリーの境遇を交換したいとは思っていない。彼女には自負心がある。この時点ではケイトはまだミリーを利用しようとは考えていない。ただ、ケイトはミリーから数々の贈り物を受け取っている。ケイトの心の中にミリーの富への羨望の思いが兆し始めたと言えるだろう。

第五部でミリーはマッチャムの園遊会に招かれ、そこで自分と生き写しのような肖像画を目にする。これはマニエリズム期の画家、ブロンツィーノの『ルクレツィア・パンチャティキの肖像』であると言われている。

The face of a young woman, all splendidly drawn, down to the hands, and splendidly dressed; a face almost vivid in hue, yet handsome in sadness and crowned with a mass of hair, rolled back and high, that must, before fading with time, have had a family resemblance to her own. The lady in question at all events, with her slightly Michael-angelesque squareness, her eyes of other days, her full lips, her long neck, her recorded jewels, her brocaded and

wasted reds, was a very great personage—only unaccompanied by a joy.<sup>22)</sup>

肖像画の女性を見てミリーの目には涙が浮かんで来る。「彼女は、死んで、死んで、死んでいた」<sup>23)</sup>と思い、「私はこれより決して良くはならないでしょう」<sup>24)</sup>と言う。ミリーはこの絵の鉛色の顔色をした、喜びを知らない女性に自分の将来の死すべき運命を読み取っていたのである。そしてこの女性の豪華な宝石類はミリーの富にもつながる。そしてルクレツィアの首飾りの銘には『愛は限りなく続く』という意味のフランス語が彫り込まれていると言われているが、これもミリーの死後も続くデンチャーにたいする愛情を示唆している。

第五部の二章でミリーはロンドン医学界の最高権威であるルーク卿の診察を受けに行くのにケイトに付き添いを頼む。これはデンチャーとのことでケイトに疑わしい印象を持ったミリーの償いの気持ちから自分の秘密の一部を打ち明けようとしたためであると推測できる。しかしミリーはケイトに診断の内容を教えようとはしない。いらだったケイトは「何も教えて下さらないのに随分要求だけはなさるのね。」<sup>25)</sup>とミリーを非難する。ミリーは再びルーク卿を訪問するが彼との間に信頼関係が築かれたことを確信する。医者からミリーは自分の運命をはっきりと読み取り、孤独感にさいなまれる。ここで医者がミリーに『生きる』ことを勧めるのは、ジェイムズの『使者たち』に通ずるものがある。一方ケイトはミリーが二度目の診察を受けた日の夕方、わざわざホテルをたずねて来て真相を探ろうとするが、ミリーはあくまでもしらを切り通す。「完全無欠の美と健康を誇りながら、友人の生死にかかわる報告を求めた」<sup>26)</sup>という印象を与えたケイトに対し、どこも悪くないと断言する。あくまでも執拗に追及しようとするケイトの態度には友情の中にも欺瞞的な要素が見え隠れする。また、ミリーのデンチャーに対する気持ちが察せられた後のケイトの意味ありげな眼差しや優越感にもミリーを対等の立場で見なしていない彼女の真意が現れている。

六章においてケイトはミリーに叔母のラウダー夫人や自分に関する暴露を行う。ミリーの欠点を挙げるかのように「アメリカ人の精神がある種の問題に関してどれほど理解力を欠いているか」<sup>27)</sup>を皮肉そうに述べる。これは自分をめぐる環境、殊にデンシャーとの関係や、ラウダー夫人に代表されるロンドン社交界といったものに対するミリーの無知を嘲ったものだと考えられるが、ジェームズの作品に典型的な旧世界ヨーロッパの経験と新世界アメリカの無垢を取り上げたものである。そしてデンシャーとのことで自分のアリバイを作るため、野心家の貴族、マーク卿の名を挙げる。自分とマーク卿との結婚を叔母が望んでいるのは確かだが、自分もそれに従うと見せかけるが、ミリーはケイトの発言がアリバイ作りのためだとはっきりと見抜いている。ケイトは自信や優越感を持つあまり、無垢なアメリカ娘のミリーを実際以上に低く見ている。自分の頭の良さに溺れているとも言えるだろう。そして彼女は次のようにまで言い切る。

“We’re of no use to you it’s decent to tell you. You’d be of us to us, but that’s a different matter. My honest advice to you would be... to drop us while you can...Therefore you’re under no obligation. You won’t want us next year; we shall only continue to want you... Oh you may very well loathe me yet !”<sup>28)</sup>

このケイトの言葉をどう判断すべきだろうか。文字どおり、ミリーのためを思っただけの説得か。あるいは、何も知らないミリーをやゆしているのか、それともそのようなミリーに対するいらだちからのものなのか。それともラウダー夫人を初めとする俗悪で他人を利用しようとする社交界に対する腹立ちのためだろうか。またはミリーの彼女に対する信頼と友情への自信がなせる行為なのか。そのいずれとも取れるだろう。ケイトの最後の言葉に、後のミリーに対する彼女の策略が感じられる。ケイトはいずれ自分がミリーを利用しようとすることを潜在的に感じている。

そしてこの作品の一つのクライマックスとも言える場面が続く。このよ

うなケイトの言葉にミリーが何故そんなことを言うのか尋ねたとき、「何故ならあなたが鳩だからよ。」<sup>29)</sup>と答える。ケイトにとってミリーは柔和で、人を疑わない、無垢な鳩なのである。そしてその鳩は周囲の人間にその翼を広げて影響を与える一方、彼らから利用されようとしている。恐らく、この時点でケイトはそれほど深い意味で『鳩』という言葉を使ったのではないかもしれないが、『鳩』は今後のミリーの行動の規範となったのである。

“Because you're a dove.” With which she felt herself ever so delicately, so considerately, embraced; not with familiarity or as a liberty taken, but almost ceremonially and in the manner of an accolade; partly as if, though a dove who could perch on a finger, one were also a princess with whom forms were to be observed. It even came to her, through the touch of her companion's lips, that this form, this cool pressure, fairly sealed the sense of what Kate had just said. It was moreover, for the girl, like an inspiration: she found herself accepting as the right one, while she caught her breath with relief, the name so given her.<sup>30)</sup>

ここでもうひとつミリーの主要なイメージとなる『王女』という言葉が用いられる。『王女』には見られる存在としての意味と、その物質的豊かさの意味がある。更に常に人に取り巻かれてはいるが、本当のところ、誰にも真実を明かせないという孤独のイメージがある。

翌日、夜明けの部屋でこのときの印象をまとめようとしたミリーは「自分が豹のように動き回る動物とただ一人相對している気持ちに襲われた」<sup>31)</sup>のを思い出した。このことは自分がいずれケイトによって何らかの形で脅かされるのを無意識の内に感じ取っていたと言える。また、かつてケイトは自分が鷲のような叔母のラウダー夫人に狙われている子羊のイメージを自分自身に持っていたが、ここではケイト自身が獲物を狙う捕食動物のイメージに変化している。複雑で救いようのない境遇の中で苦闘し、自



分とは対照的なミリーと付き合ううちに現れた変化かもしれない。

七章でナショナル・ギャラリーに出掛けたミリーはデンチャーとケイトの逢い引きの現場に遭遇する。そこでケイトの取った手段は「一切の釈明なしにその場を取繕う文明社会独特の手腕」<sup>32)</sup>だった。ミリーとは異なった世慣れたイギリス現代女性の態度である。つまり、何の不思議もない、二人の間には何らやましいところがないというような雰囲気を作ることを直接的な合図なしにデンチャーに納得させたのである。それに対してミリーは「アメリカ娘らしく」振る舞うことで三人のぎこちなさを救ったのである。その後のミリーの行動規範は前述の『鳩としての振る舞い』とここからの『アメリカ娘らしさ』となる。そしてミリーがこじつけかもしれないと思いながらも、ケイトはデンチャーがケイトを恋するほど、彼のことを思っているわけではなく、当惑しているのだと自分を納得させるような解釈を試みさせるような、ミリーに対して取り入るような態度を取るのである。ミリーの洞察力は深まりつつあるものの、ケイトの方がまだまだ上手だという印象を与える。

第六部ではデンチャーの視点でケイトとの愛情が描かれている。デンチャーの性急な愛情に比べ、ケイトは彼のいらだちを押さえるために、ミリーと会うこととなったナショナル・ギャラリーで彼と会うこととした。「その手際が余りにも鮮やかだったので、彼女と別れるまで彼は彼女の意のままに動かされた自分に気が付かなかった」<sup>33)</sup>ほどである。その後ラウダー夫人の問題に関しても、ケイトは「私の手際は悪魔的になった」<sup>34)</sup>ので自分に任して欲しいとデンチャーを説得する。ケイトは恐ろしいほどの自信に溢れている。デンチャーの性急な、しかし男性としての正直で率直な求愛表現に較べるとやや作弄的なものを感じる。デンチャーが「今のままの僕と結婚してくれませんか。」<sup>34)</sup>と二人の問題としてだけ結婚を考えているのに対し、多少は意志を動かされたものの、ケイトは次のような答えをする。

“Ah do let me try myself ! I assure you see my way so don't spoil it: wait for me and give me time. Dear man...only believe in me, and

it will be beautiful.”<sup>35)</sup>

ここで彼女が指しているのは叔母のラウダー夫人のことだけではない。彼女はデンチャーよりもっと先を見据えているのだ。社交界での地位のために姪のケイトを持ち駒として有利な結婚をさせようとする叔母を出し抜くだけでなく、ミリーを利用しようとする。それもデンチャーと会う機会を作るのに利用しようとするだけでなく、ミリー自身を利用しようとする。まさしく『悪魔的』ともいえる彼女の手際である。父、姉、叔母に利用され続けようとしたケイトが今度は他人を利用しようとする。ケイト自身が嫌悪していた仕組みに自らの意志で組み込まれたかのようなのである。そしてミリーのデンチャーに対する思慕の念を利用しようとするのはジェイムズの国際テーマを取り上げた作品でよく見られる腐敗した旧世界を代表する人間であるかのようだ。ケイトのミリーに対する策略がこのあたりから紡がれ始める。

ラウダー邸での晩餐会ではケイトだけでなく、ラウダー夫人やストリングム夫人までもが、デンチャーとミリーを結び付けようとするかのような態度を取る。ケイトは与えられた役を完璧にこなす女優のように、自分の目的と叔母の意に沿うような振る舞いをし、ラウダー夫人はケイトとデンチャーとの仲を裂くために、ストリングム夫人はミリーの気持ちを理解していて、と三者三様に仕向けるのである。

ケイトはデンチャーにミリーのことを「うなるような銀行預金のある天使」<sup>36)</sup>という言い方をする。そしてただ単にミリーを搾取しようと言うのではなく、死すべき運命にある彼女を慰めようとする同情心が感じられもする。しかし、これはケイトの自己欺瞞ではないだろうか。もちろんミリーに対する同情心があるのは否定できないが、弱肉強食の考えが大勢を占めていたと言えるだろう。そして彼女の言葉を借りれば、デンチャーも又彼女の「最も貴重な持ち駒」として最大限利用するつもりである。彼女は自分の知恵に溺れているとも見える。そしてデンチャー自身はそのような策略に嫌悪感を抱きながらもケイトに操られていく。

ケイトはミリーの病に対しても鋭い洞察力を働かせ、彼女の病気が結核ではないと断言している。ジェイムズはミリーの病気が何であるか明言はしていないが、ルーク卿が外科の権威であることを考えるとケイトの勘もあながち外れているとは言えないだろう。しかしケイトははっきりと病気が大嫌いだと述べている。このことからケイトが、決して同情心だけから、自分の恋人であるデンシャーを一時的にせよ、ミリーに貸すようなことではないと言えるだろう。

She looked at him now a moment as for the selfish gladness of their young imminities. It was all they had together, but they had it at least without a flaw—each had the beauty, the physical felicity, the personal virtue, love and desire of the other. Yet it was as if that very consciousness threw them back the next moment into pity for the poor girl who had everything else in the world, the great genial good they, alas, didn't have, but failed on the other hand of this.<sup>37)</sup>

このときの二人は自分達の健康と将来と愛に酔いしれているかのようである。ミリーと二人の状況は全く正反対とって差し支えない。かたや、若さと健康、美しさ、愛情に恵まれながらも財産がないために苦境に陥っている恋人同士であり、かたや巨万の富を持ち、様々なしがらみからは解き放たれ、その財産によって不可能なことはないと思われるような立場にいなながらも、病によってその将来が限定されている孤独な娘である。財産がないために叔母に縛り付けられているケイトが、デンシャーを近付けさせることで先の短い娘にほんの少し人生の楽しさを味わわせてやり、その報酬に自分の恋人に贈与されるだろう財産で自分達が幸福になって何が悪いと考えるようになっても不思議ではない。ケイトは目的のためには「自分が何を犠牲にしなければならないか」<sup>38)</sup>を認識している。

デンシャーはミリーとの交際を再開するが、彼自身の立場からすれば、あくまでも友人として最大の善意を胸にミリーを訪問するようになる。「立

派で楽しくて誰憚る必要のない、上品で罪のないアメリカ風の付き合い」<sup>39)</sup>が始まるが、これはミリーが意識して行っていることにも起因するが、デンチャーがアメリカで受けた「アメリカ娘は希なことではあるが、ミリーのような魅力を持っている場合明らかに世界で一番付き合いやすい相手だ」<sup>40)</sup>ということにも原因がある。このアメリカ娘についての考察はジェイムズの作品の中では何度か繰り返し用いられる。ヨーロッパの人間やそこに長く暮らしたためにアメリカ人としてのアイデンティティを失ったような人々からは眉をひそめられる事もあるようなアメリカ娘たちの気軽さをここでは肯定的にデンチャーに受け取らせている。また、デンチャー自身の「良識と人柄のよき」にも助けられたことによる。

ケイトはミリーにデンチャーをはねつけたという印象を植え込み、ミリーの同情心を煽り、二人の交際がスムーズに行くように細工した。このミリーの「美しい誤解と無駄な同情」<sup>41)</sup>はデンチャーの良心を苦しめるようになる。このあたりからケイトとデンチャーの間の価値観の相違がより鮮明になってくる。ケイトは彼とミリーとの付き合いが進んで行くことに些かの危惧も抱いてない。それどころかデンチャーが彼女の計画をうまく運んで行くことに満足すらしている。自分の思いのままに相手を操ろうとする態度はジェイムズの作品中、ヨーロッパ人や、ヨーロッパ化したアメリカ人が、アメリカ娘の財産を当ての結婚を画策するときによく用いられるモチーフである。

第七部の初頭、ストリングム夫人はラウダー夫人を訪れ、ミリーの病気の真相を打ち明ける。ミリーの生きがいはデンチャーとの愛だと考えるストリングム夫人に、ラウダー夫人はデンチャーに彼女を愛させるように仕向けるべきだと言い、ケイトが彼を愛していること（ラウダー夫人によればそれはケイトの思い違いである）をミリーにたいしてはっきりと否定すべきだと言い切る。ケイトは叔母を出し抜こうとしているが、このラウダー夫人もケイトを間接的にも操ろうとし、ストリングム夫人を助けるふりをして彼女を利用しようとしている。ケイトの策略は彼女の知らない所で叔母やストリングム夫人によっても、違った観点から推進されて行く。

三章で舞台はミリーの借りたヴェニス宮殿、パラッツォ・レポレルリへと移る。忠実なイタリア人の召し使いにかしづかれて豪華な宮殿で過ごすミリーはまさしく王女のイメージである。ケイトとラウダー夫人も共にこの宮殿で暮らしている。ケイトとミリーは「二人だけになると決まって仮面を脱ぐようになった」<sup>42)</sup>が、あくまでも表層に於いてであり、心の底を打ち明けるような話は一切していなく、お互いに相手の隠し事を意識している。ここでも優位に立つのはケイトであり、彼女はミリーが胸に秘めた「大胆で激しい自尊心、微かな足音一つ近づくのを聞きつけただけで鋼鉄のように反発する自尊心」<sup>43)</sup>を見抜いていた。この場面で二人はメーテルリンクの劇の中の王女と女官のイメージで描かれる。このころのケイトはミリーに対する「自分の美德と良心と信頼性を信じていたので、その自信を足掛かりとして計画を推し進めることになる」<sup>44)</sup>と述べられているが、この自信は過信とも言い換えることができ、優位に立つものが下のものに情けをかけるといった性格のものである。

第八部でデンシャーがヴェニスにやって来たのもケイトの計画によるものではあったが、彼はケイトに対する渴望に胸を焦がしながらも、ケイトの偽善的態度に目を見張り、ミリーとの交際にケイトの指図を感じずに楽しんでいた。つまり彼もミリー自身に魅かれ始めていたのだ。しかしマーク卿のことも含め、彼にはケイトに対する不安感がある。ケイトはいつもの巧みな説明で彼を納得させかけるものの、どこか彼の反発心を駆り立てるところがある。自分はケイトに良いように操られているに過ぎないのではないか、ケイトは彼との愛情よりもミリーの財産に目が眩み、そのためにのみ彼を利用しているのではないかという疑いが時折顔を出すのである。彼はミリーとの交際を進めて行く条件としてケイトに彼との肉体関係を要求する。そして彼女はそれに応じる。ジェームズは男女の性については余り言及することは少ないのでこれは希な例である。ただし、デンシャーは愛情を確かめるために要求したのに対し、ケイトは財産を得るために彼を納得させようとして応じたのであってここでも二人の相違が如実に現れている。

宮殿でのミリーの催した夜会の席でミリーの付けている真珠の首飾りを見たケイトは激しい感情に襲われる。「彼女(ミリー)は鳩なの」<sup>44)</sup>というケイトの言葉に彼ははっとする。彼にとって『鳩』と思えるのはミリーの内面である。しかしケイトにとって何よりも鮮烈なのはミリーの富の力である。真珠の首飾りもケイトにとっては羨望の気持ちを駆き立てるミリーとの隔たりでしかない。ミリーとの友情を断ち切った訳ではないが、富への執着心がいよいよ増し、結果的にデンチャーの要求に応じることとなったのである。

第九部ではケイトは叔母と共にロンドンへ戻っていて直接的には姿を現さない。しかし一夜を共にしたケイトの記憶がまとわりついて彼に計画の遂行を要求するのだった。デンチャーの性格からすれば、ケイトが彼の欲求に応じた以上、彼も又彼女の希望を受け入れざるを得ないことは自明の理である。

そんなデンチャーに対しレポレルリ宮殿が扉を閉ざしたのはマーク卿が再びミリーのもとを訪れた後のことである。マーク卿の訪問はまるで「突如として悪の総てがヴェニスに満ち溢れた」<sup>45)</sup>かのように激しい嵐をヴェニスに、そして登場人物たちの心の中に巻き起こしたようである。そしてミリーは「壁に顔を向けてしまった。」<sup>46)</sup>ストリングム夫人は総てを知ったうえでデンチャーにマーク卿の言ったケイトとの長い婚約を否定してほしいと訴える。デンチャー自身動揺し、逡巡し、すぐには解答を出せない。その後ルーク卿が到着し、マーク卿の時とは逆にヴェニスでは天候が回復する。そして数日の診療の後、ルーク卿はデンチャーにミリーが会いたがっているとの伝言を残してヴェニスを去る。その場面は直接的には描かれない。

第十部はデンチャーの視点で語られる。彼はロンドンに戻ってから二週間もケイトに連絡を取っていないかった。ケイトはいつもどおり冷静に対処して彼を感心させるが、会わなかった数週間が二人の間に更に微妙な食い違いを際立たせる。彼はマーク卿が彼とケイトの婚約をミリーに暴露し、その衝撃がミリーから生きる意欲を奪ったと思うと告げる。ケイトは彼が

ミリーの命を救うためにもその事実を否定しなかったことで彼を責める。彼にはその機会があり、ストリングム夫人から頼まれたにもかかわらず、彼は否定しなかった。ケイトはミリーが彼を愛している以上、嘘だとわかっても否定すべきだったと考える。

”She (Milly) wanted you. She would have taken from you what you could give her and been glad of it, even if she had known it false. You might have lied to her from pity, and she have seen you and felt you lie, and yet since it was all for tenderness she would have thanked you and blessed you and clung to you but the more. For that was your strength, my dear man that she loves you with passion.<sup>47)</sup>

彼はミリーの精神力に圧倒され、また彼自身の良心からも嘘をつくことは出来なかった。更に彼はもし二人の婚約を否定すれば、実際に婚約を取り消しただろうと述べる。そしてミリーと恋に落ちたと言ってもよいとまで言い切る。しかしそれはケイト自身のもくろみから出たことであり、ミリーが死にかけている以上、構わないではないかと詰め寄る。結局ミリーは「情熱を実現した人の心の安らぎを得た」<sup>48)</sup>とケイトは結論づけ、自分達は成功したのだと言い張った。この『成功』とは何を指しているのか。ミリーの愛情をデンチャーに向け、彼に遺産を送るように仕向けることである。ミリーは恐怖に駆られてはいたが、最後まで王女の品位を保ち続けていた。別れのとき彼は「自分が許され、捧げられ、祝福された」<sup>49)</sup>のを感じたのを思い出した。そうして一週間が過ぎるころ、彼は自己嫌悪の念に耐え切れなくなって、今のままの自分と結婚して欲しいとケイトに申し込む。ケイトは遺産が届くまで待つことを提案する。彼はケイトに恐れや絶望を感じる。それを見て取ったケイトは彼の情熱に訴え、彼を思いのままにする。

クリスマスに彼はルーク卿の家で、ラウダー夫人から、「ケイトの言う私

達の愛すべき鳩はその素晴らしい翼を畳みました。(中略)もっと大きな幸福に向かって飛び立つために」<sup>50)</sup>と聞かされる。彼はクリスマス・イヴにミリーから手紙を受け取っていた。叔母の家を出て姉の家に居るケイトに封を切らずに渡す。それをケイトはそのまま暖炉に投げ込む。彼女には手紙の内容が遺産贈与のことであるのが分かっていただけでなく、ミリーの思いが込められたものであることを感じて嫉妬心からも燃やしてしまったのだ。ミリーの最後の思いはデンチャーには知らされないままに終わる。このケイトの行為は彼の絶望感を増すだけである。詳しい通知はニューヨークから来ると言ったケイトの関心事は既に遺産の事のみである。

ケイトの予告通り、デンチャーのもとにアメリカの法律事務所から書留が届き、彼はそのまま短い手紙を添えて彼女に送った。彼はケイトが封を切らずにアメリカの法律事務所に戻すことを希望しながら、ケイトに任せた。果たしてケイトは何のためらいもなく遺産の中身を見てしまう。デンチャーは彼女と一緒に断ってくれと頼む。ケイトは彼が倫理観からだけでなく、ミリーへの神聖な感情からも受け取りたくないのだと察する。彼女はミリーのデンチャーに及ぼした精神力の強さに圧倒されるような衝撃を受ける。ここでケイトは自分の敗北を悟る。

“I used to call her in my stupidity for want of anything better a dove. Well she stretched out her wings, and it was to that *they* reached. They cover us.”<sup>51)</sup>

ケイトはデンチャーがミリーの思い出を恋しているのをはっきりと認識している。ケイトは遺産を受けとってデンチャーと別れるか、遺産を送り返してデンチャーと結婚するかどうかを選ぶように迫られる。そして結局遺産を選び、デンチャーとは別れることになる。



### III

第一部から第十部までを見てくるとケイトの変貌がはっきりと理解できる。最初は雌ライオンや鷲に狙われる『子羊』のイメージで語られていたケイトが半ばを過ぎるころから今度は逆に『豹』のような捕食動物のイメージへと変化する。この原因はそもそもどこにあるのだろうか。

ケイトは作品の初めではたとえ貧乏になろうとも父親と一緒に暮らそうと申し出る。彼女は金持ちの叔母の養女のような扱いを受け、父親と断絶させられるよりも、名誉を汚した墮落した父親と暮らすことを選択する。このときの彼女は財産よりも親子の絆を選ぼうとしていた。それを阻止したのはほかならぬ父親である。彼も貧しい未亡人の姉も彼女を利用してそのおこぼれに預かろうと、ケイトに執拗に非難と要求を繰り返す。ケイトは叔母の家に引き取られ、今度は叔母に有利な結婚という取引の材料に使われることとなる。ケイトは作品中、その美貌と頭の良さ、洗練された社交術、人を圧倒するような雰囲気、人生に対しての秀でた能力が彼女を取り巻く醜悪な環境の中で際立っていることが繰り返される。そして彼女はそのことをはっきりと自覚している。その結果、彼女はこの状況を解決する唯一の手段として自分の商品価値を認識し、最大限に利用しようとする。名誉も失われた貧困の世界からラウダー夫人の邸宅に移った後、その贅沢さに魅かれ、叔母の権力に圧迫されたケイトはより一層物質主義に向かうようになる。

デンチャーとの愛に関しては彼女は真摯で、打算的なところはなかった。彼に魅かれた理由も彼の精神世界の豊かさにあった。彼は貧しくとも、純粹で真剣に彼女を愛している。ケイトの彼に対する愛情も真剣なもので、彼の財力の無さのために、叔母や家族が反対することも彼女にとっては大きな障害ではない。物質主義に転向した後もデンチャーに対する想いは変わらない。彼との愛情は、現実に押し潰されそうな彼女の逃げ場だったとも言える。そしてケイトは富と愛の両立を図ろうとした。そのためミリ-

への策略を画策せざるを得なくなった。愛情だけを頼みにして結婚した姉の現在の敗残者のような姿は反面教師の姿を提供している。ケイトは自分は人生の勝者になろう、自分にはその能力も資格もあるのだと自負している。

ミリーとの関係にしても最初はただの友情であったものが、自分とミリーを隔てている富の力をまざまざと見せつけられ、ミリーの病を知り、ミリーのデンチャーへの恋心を知ったことで変化していく。この間に叔母との問題、マーク卿との結婚話、デンチャーとの袋小路に追いつめられたような愛が彼女の変貌を押し進める。ミリーの凄まじいほどの富を前にケイトの心中に羨望の思いが芽生えても不思議ではない。それを前にして、ケイトの中にこの資本主義における貧富の差という矛盾への怒りが湧き起こって来る。アメリカという資本社会で遺贈された巨額の富を持つミリーはケイトとは全く対照的な存在である。ケイトの持つ貧困、制約、健康、愛情、実利的性格、家族が、ミリーの場合には富、自由、病氣、愛するものの欠如、孤独とことごとく逆である。世慣れていて、旧式で因蔽された彼女の周囲のイギリスの社交界の墮落した実態を知っているケイトにとって無垢なミリーの純粹な好奇心はむしろこっけいで危なっかしいものに映る。自分達との関係を断つように勧めるのもこの点に起因している。

一方、無視できないのは自分の知力に対するケイトの絶対的ともいえる自信である。特に後半、デンチャーを操って偽りの恋を仕掛け、ミリーの遺産を狙うあたりでは『悪魔的』とも言える。彼の情熱を体よくあしらい、彼の迷いを常に前向きに自分の思うような形で解消していく。その中には、短いミリーの人生を愛の成就という充実感で溢れさせてやりたいという親切心があることも否定できない。しかしそれはあくまでもケイトの考え方であり、独善的とも言える。実態を知ったときのミリーが二重に裏切られた感を持つのは当然である。この独善的親切心と打算はケイトにとって分けて考えることはできないのである。

結果的にケイトのもくろみは外れ、財産は手にしたものの、デンチャーを失うこととなる。最後にデンチャーに自分か、遺産かどちらか選ぶよう

に迫られたとき、彼を諦めるのはミリーの精神に対するケイトの敗北である。『鳩の翼』に覆われた二人の関係は修復不可能なまでに変化してしまったのである。富への執着心を強め、そのために他人を操ろうとしたケイトは自分が嫌悪していたラウダー夫人と何ら変わることはない物質主義者へと変貌していたのだ。ケイトへの愛にひたすら服従していたデンシャーはケイトの凄まじい意志の力や、目的遂行のためにならどんなに非情にも冷酷にもなれる本質に段々と自分とは相容れないものを感じ始める。彼の変化に気付いたケイトは彼の情熱を利用して何度か翻意を促すことに成功する。しかし彼はミリーの姿を、特にその精神世界を深く知るようになるうちに、本来持っていた道徳観が目覚め始め、ケイトとの亀裂を深めて行く。ケイトを責めるのは簡単だが、彼女もまた社会の犠牲者でもある。そして最後にデンシャーを選ばなかったのは彼女の富への欲望のためだけでなく、ミリーの思い出を愛してしまったデンシャーへ見せる彼女の誇りとも言えるだろう。「決して元には戻れない」<sup>52)</sup>と言う彼女の最後の言葉は自分のしたことの結果を認めて嘆き、悔悟し、しかしそれを受け入れようとする彼女の誇りが現れている。

ジェームズがヒロインがあたかも二人いるかのようにケイトとミリーを作り出したのは、この対照的な二人を対照的に描くことによってお互いの姿をより鮮明に提供しようとしたためである。ケイトを全面に出して、写実的に描写するのに対し、ミリーは登場場面も少なく、曖昧で間接的な描写が多い。これはマニエリズムの絵画に見られる、主題の人物が後方に小さく描かれ、説明する人物群が前景に大きく描かれるという手法を踏襲している。<sup>53)</sup>このような手法の面からも、この作品は複雑な重層構造をなしていると言える。

#### 《註》

- 1) Henry James, *The Art of the Novel* (New York: Charles Scribner's Sons, 1953)

- 2) ibid.
- 3) ibid.
- 4) ibid.
- 5) ibid.
- 6) ibid.
- 7) 小論(1990)
- 8) James, ibid.
- 9) ibid.
- 10) James, *The Wings of the Dove, The Novels and Tales of Henry James*, 2vols., (New York : Charles Scribner's Sons, 1908), I. p.30以下の引用は  
総てこの版による。また以下原文の訳は、青木次生訳『鳩の翼』、『ヘンリー・  
ジェイムズ作品集3』(国書刊行会, 1983)を参考にさせていただいた。
- 11) ibid., I. p.31
- 12) ibid., I. p.30
- 13) ibid., I. p.71
- 14) ibid., I. p.72
- 15) ibid., I. p.95
- 16) ibid., I. p.73
- 17) ibid., I. p.121
- 18) ibid., I. p.125
- 19) ibid., I. p.124
- 20) ibid., I. p.181~182
- 21) ibid., I. p.190
- 22) ibid., I. p.220~221
- 23) ibid., I. p.221
- 24) ibid., I. p.221
- 25) ibid., I. p.221
- 26) ibid., I. p.258
- 27) ibid., I. p.277
- 28) ibid., I. p.281~282
- 29) ibid., I. p.283
- 30) ibid., I. p.283
- 31) ibid., I. p.282
- 32) ibid., I. p.294
- 33) ibid., II. p.6
- 34) ibid., II. p.19
- 35) ibid., II. p.19
- 36) ibid., II. p.51

- 
- 37) *ibid.*, II. p.55
  - 38) *ibid.*, II. p.60
  - 39) *ibid.*, II. p.70
  - 40) *ibid.*, II. p.72
  - 41) *ibid.*, II. p.75
  - 42) *ibid.*, II. p.138
  - 43) *ibid.*, II. p.139
  - 44) *ibid.*, II. p.219
  - 45) *ibid.*, II. p.259
  - 46) *ibid.*, II. p.270
  - 47) *ibid.*, II. p.327
  - 48) *ibid.*, II. p.332
  - 49) *ibid.*, II. p.343
  - 50) *ibid.*, II. p.356
  - 51) *ibid.*, II. p.403~404
  - 52) *ibid.*, II. p.404
  - 53) マニエリズムの絵画の手法, 及び p.99~100のブロンツィーノ作の肖像画については, 山川鴻三著「イギリス小説とヨーロッパ絵画」(研究社出版, 1987)を参考にさせていただいた。